

当院におけるがん診療について



■ 治療の流れ

① 自覚症状・がんの疑い

なんとなく体の不調が続いたり、がん検診や精密検査で異常を指摘された場合などは、放っておかず、なるべく早く受診しましょう。

② 受診・診察・各種検査

気になっていること、症状などで心配に思うことは、担当医に伝えてください。
各種検査の予約を行い（当日を含む）、次回の診察日を決めます。



③ 診断・治療方針の検討

内視鏡検査や CT、MRI などの画像検査を行い、場合によっては病理検査の結果に基づき、がんの診断を行います。
発生した部位や進行度合い、患者さんの年齢や体力、他の病気の有無を確認しその患者さんにあった適切な治療法を選択していきます。

④ 治療開始

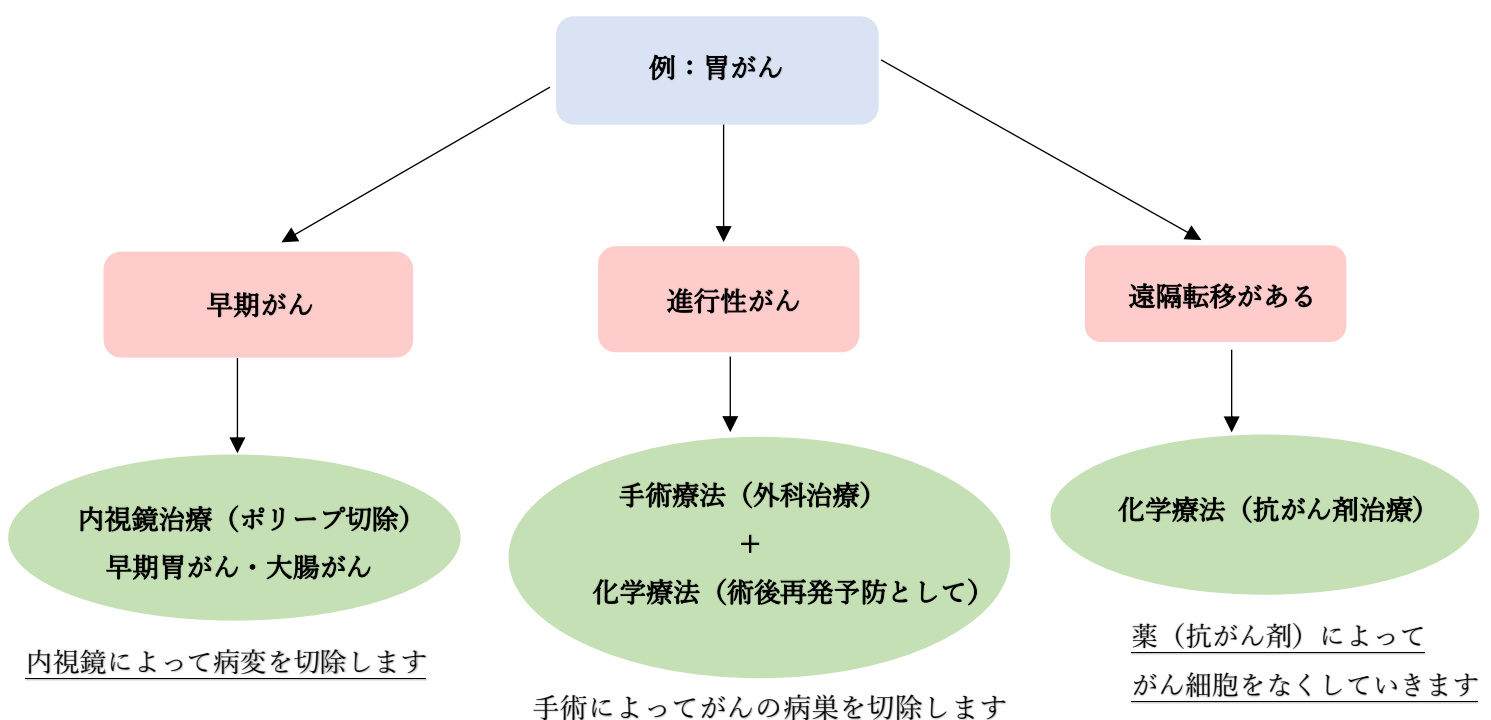
手術療法（外科治療） / 化学療法（抗がん剤）

当院は、放射線治療を行っておりません
必要に応じて、近隣の病院へ紹介いたします

⑤ 経過観察

治療後の副作用、体調の変化やがんの再発の有無を確認する為に定期的に通院（検査）します。
治療効果を見ながら他の治療法を検討します。

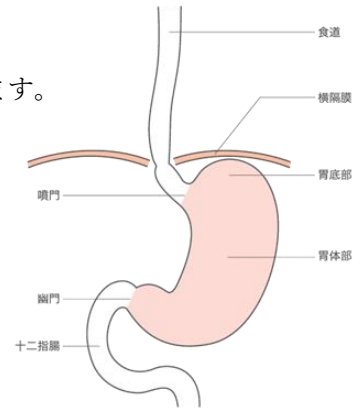
当院では、消化器（食道、胃、小腸、大腸、肝臓、胆嚢、膵臓）がんを中心とした治療を行っております



■ 手術療法（外科治療）がんの病変を取り除く方法

胃がん

早期の胃がんは、あまり症状が見られないことが多く進行しても症状が出ないこともあります。代表的な症状として、胃のみぞおちの痛み・不快感・違和感・胸やけに加え、吐き気や食欲不振の消化器症状が特徴的です。



胃がんには種類と進行度合いにより、さまざまなものがあります。

がんは大きく分けて「早期胃がん」と「進行胃がん」の二つに分けられます。

胃がんは胃粘膜の中から発生し、何年もかけて検診で見つけられるくらいの大きさに成長します。これが早期胃がんです。

ここからさらに広がり、胃粘膜の下、筋肉の層まで到達したものを進行胃がんといいます。

特殊ながんとして、胃の壁の内側で増える「スキルス胃がん」があります。スキルス胃がんは早期発見が難しく、普通の胃がんに比べて増殖が早いのが特徴で、胃透視（バリウム）検査で発見されることが多いです。

<手術の種類>

・内視鏡的粘膜切除術

内視鏡（胃カメラ）を用いて、がんの病巣を切除する方法です。

胃がんの広がりが浅くて小さく、さらに分化度が良い場合に行います。

したがって、CTなどの検査でリンパ節転移の可能性が高い場合や、小さくても広がりが深い場合は、この術式は行われません。切除後も胃は温存されるため、食生活に対する影響がなく、短期間でもとの生活に戻れることが最大の利点です。当院では3～4日程度の入院で行っております。

・腹腔鏡下胃切除術

腹腔鏡を用いて、胃を切除する手術です。

お腹の壁と臓器との間の空間に炭酸ガスを入れて膨らませ、視野を確保します。

おへそにカメラを入れるための穴を開け、腹腔鏡（カメラ）を挿入します。

同時に手術に用いる器具を挿入するため、5ミリから10ミリ程度の小さな穴を5-6ヶ所開けます。

そして、腹腔鏡でお腹の中を観察しながら胃切除や周囲のリンパ節の切除を行います。

お腹を大きく開ける手術と異なり、早期回復や早期退院、術後の痛みを抑えられるなどのメリットがあります。

また、傷口も小さく目立ちにくいという特徴もあります。一般に手術時間は3～5時間くらいで、術後約10日間の入院となります。当院では、積極的にこの“患者さんに優しい手術”を行っています。

・開腹術

進行胃がんを中心に多臓器を同時に切除しないといけない場合には、従来の開腹手術を行います。

一般的な術式の場合、手術時間は3-4時間程度ですが、多臓器を切除する場合、あるいはがんの広がりが広範な場合には7-8時間かかることがあり、入院期間も1か月程度となります。

<手術費用の目安>手術費用は、進行のステージや部位によって治療方法や術式によって費用が大きく変わります。

術式	3割負担	1割負担
腹腔鏡法・開腹法	約270,000円	約90,000円

※上記は麻酔・薬材料費を含んだ金額です。この費用とは別に入院費や部屋代などもかかります。

高額療養費制度を利用いただきますと上限を超えた金額が支給されます。

■ 大腸がん

お腹の痛みや違和感が出現することがなく、がんが進行して大きくなると腫瘍が便の流れを妨げたり（便秘）、腫瘍から出血を起こす（血便）ことで症状として自覚されるようになります。

大腸がんは食事や遺伝など後天的な因子で粘膜内にがん細胞が発生した病気です。

大腸は回盲部、上行結腸、横行結腸、下行結腸、S状結腸に分かれます。

大腸がんは深さによって「早期がん」と「進行がん」に分けられます。

早期がんとは粘膜下層部にとどまったもの。進行がんとは、筋層を越えて進んでいるものを指します。

一般に筋層内にはリンパ管や血管が多く存在し、がんがその内に入ることにより血管リンパ管を通り全身に広がり進行がんはリンパ節転移や遠隔転移が多いといわれています。

<手術の種類>

・内視鏡的粘膜切除術

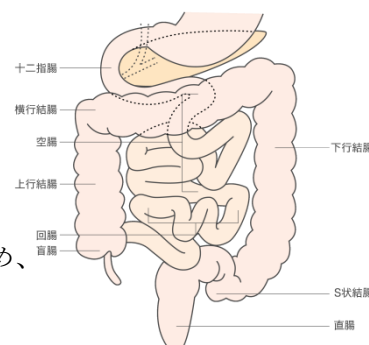
内視鏡（大腸カメラ）を用いて、がんの病巣を切除する方法です。

大腸がんの広がりが浅くて小さく、さらに分化度が良い場合に行います。

したがって、CTなどの検査でリンパ節転移の可能性が高い場合や、

小さくても広がりが深い場合は、この術式は行われません。切除後も大腸は温存されるため、食生活に対する影響がなく、短期間でもとの生活に戻れることが最大の利点です。

当院では3～4日程度の入院で行っております。



・腹腔鏡下大腸切除術

腹腔鏡を用いて、大腸を切除する手術です。

お腹の壁と臓器との間の空間に炭酸ガスを入れて膨らませて、視野を確保します。

おへそにカメラを入れるための穴を開け、腹腔鏡（カメラ）を挿入します。

同時に手術に用いる器具を挿入するため、5ミリから10ミリ程度の小さな穴を4～5ヶ所開けます。

そして、腹腔鏡でお腹の中を観察しながら大腸切除や周囲のリンパ節の切除を行います。

お腹を大きく開ける手術と異なり、早期回復や早期退院、術後の痛みを抑えられるなどのメリットがあります。

また、傷口も小さく目立ちにくいという特徴もあります。

しかし、直接見ながら行う開腹手術に比べて難易度が高く、手術時間が長くなるというデメリットもあります。

一般に手術時間は4～5時間くらいで、術後約10日間の入院となります。

・開腹術

腹部を切開し、直視下で行う方法です。傷の大きさは病変の大きさや発生部位によりかわりますが、以前より行われてきた方法であり、比較的安定して行える反面、出血が多くなりやすいこと、術後の痛みが大きいことがデメリットとされています。

<手術費用の目安>手術費用は、進行のステージや部位によって治療方法や術式によって費用が大きく変わります。

術式	3割負担	1割負担
内視鏡的粘膜切除術	約 54,000 円	約 18,000 円
腹腔鏡下大腸切除術	約 285,000 円	約 95,000 円
開腹術	約 225,000 円	約 75,000 円

※上記は麻酔・薬材料費を含んだ金額です。この費用とは別に入院費や部屋代などもかかります。

高額療養費制度を利用いただきますと上限を超えた金額が支給されます。

■ 薬物療法（抗がん剤）とは

<抗がん剤により治療の目的>

- ・がんを治癒させる
- ・がんを小さくする
- ・がんの転移・再発を防ぐ
- ・がんの増殖を遅らせる
- ・がんによって起こっている痛みなどを症状を和らげる



■ 外来化学療法

普段の生活を維持しつつ安心して治療を受けられる

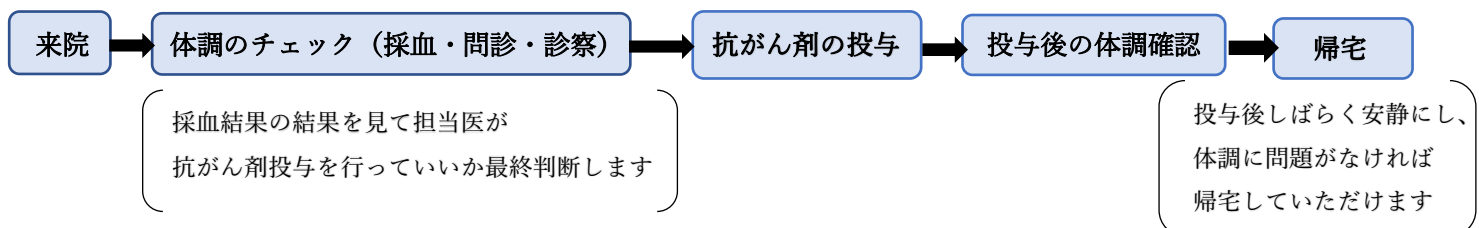
入院せずに日常生活の質を維持しつつ外来通院で、注射や点滴による外来化学療法を行うことができます。がんの種類や症状にもよってさまざまですが、通院でがん治療を行うことにより、これまでのようにご自宅での生活やお仕事をしながら治療に取り組むことができます。



当院では、外来化学療法室を設けておりベッド1台と、リクライニングチェア2台の計3台を使用しています。カーテンでプライバシーを確保し、担当医・看護師・薬剤師のサポートのもと安心安全に治療を受けていただけます。抗がん剤治療の他に、生物学的製剤を使ったリウマチ・クローン病・潰瘍性大腸炎などの治療も行えます。

また、当院は滋賀医科大学医学部附属病院と連携して行っており、他院より紹介状をお持ちの患者さんでお住まいの地域で安心してがん治療ができるよう地域医療機関との連携支援を行っています。

<化学療法当日の流れ>



<抗がん剤の主な副作用> 抗がん剤治療には、下記のような副作用が現れることがあります。

食欲不振 吐き気 嘔吐 体重減少 下痢 味覚異常 倦怠感 口内炎など

※副作用を軽減するために抗がん剤と一緒に吐き気止めも処方されます。



こんな症状はありませんか？



当てはまる方は、がんの初期症状や他の病気のサインかもしれません
専門外来受診をし検査を受けましょう

- ・お腹の痛み
- ・便秘・下痢を繰り返す
- ・便に血がついている
- ・体重が減っている



腸炎・過敏性腸症候群・大腸がん・胃がんの疑い

- ・便潜血検査
- ・大腸・胃内視鏡検査



- ・背中・のどの痛み
- ・食べものを飲み込んだ時に
喉がつかえるような感じ
- ・声がかすれる



食道潰瘍・逆流性食道炎・食道がんの疑い

- ・上部内視鏡検査
- ・CT 検査



- ・食欲不振
- ・糖尿病の方
- ・目が黄色い
- ・よくお酒を飲む



膵炎・膵臓がんの疑い

- ・血液検査
- ・腹部超音波検査



- ・咳や痰が2週間以上続く
- ・息切れ
- ・咳をしたときに胸の痛み
- ・痰に血が混じる



肺炎・気管支炎・肺がんの疑い

- ・喀痰検査（喫煙者）
- ・胸部 X 線検査
- ・胸部 CT 検査



- ・首の痛み
- ・のどの違和感
- ・首のリンパ節の腫れ
- ・体重増加



甲状腺機能低下症・甲状腺がんの疑い

- ・血液検査
- ・超音波検査
- ・頸部 CT・MRI



定期的ながん検診で大切な命を守りましょう

がんは進行するにつれ治療が複雑化し長期治療になり患者さんに身体的・経済的にも負担が大きくなります。だからこそ、**早期発見・早期治療**が重要となります。
無症状で発見するがんは、がんが進行していないケースが多いため、
早期治療することによりがんの死亡率を下げ、身体の負担が少ない治療ですみます。

早期がんは、ほとんどが無症状です。
健康だから大丈夫ではなく、健康だからこそ
定期的に検診を受けることが大切です。



■ 当院で可能ながん検診

- ・市のがん検診
- ・人間ドック
- ・肺がん検診
- ・消化器がん検診
- ・内視鏡検査（胃・大腸）
- ・乳がん検診・子宮がん検診

（婦人科疾患の治療・処置に関しては、他院へ紹介となります）



検診はがん予防・治療の第一歩！

甲南病院 健診課お問合せ・ご予約
0748-86-3415（直通）
月～土曜日 14：00～16：30
→[健診・人間ドックページリンク](#)



がん治療におけるお役立ち情報

➤ 治療費について

がん治療により生活、就労に制限が生じる場合があります。中でも治療費は、経済的な負担が大きくなります。がん治療で保険適用の治療であれば、経済的な負担をある程度抑えることができます。高額療養費制度・医療費控除・傷病手当金などのさまざまな支援制度が利用できます。詳しくは、当院受付窓口スタッフにご相談ください。

➤ 治療中の食事について

抗がん剤治療中は、食欲低下や嘔吐など食事に大きく関わる副作用が出やすいのが特徴です。食事は、必要な栄養素を補うだけでなく、日常生活の楽しみのひとつで生活の質（QOL）の向上にも繋がります。抗がん剤治療中の食事は、副作用を軽減させるためのご自身に合った食事の工夫が必要になってきます。手術後や抗がん剤治療中に、十分な食事が摂れないときや食事の内容が偏ってしまうときは、栄養管理士から患者さんの病状に応じた献立や調理法のアドバイスも受けていただけますので、担当医や看護師にご相談ください。



➤ 治療中の運動について

まず、抗がん剤治療中や治療後 24 時間以内の運動は避けましょう。副作用の出方や体力レベルが人それぞれ違いますが、出来るときに出来ることから始めましょう。座ったり、立ったり、出来れば歩くというふうに、適度な運動は気分転換にもなります。家族や周りの人の助けを借りながら、無理のない範囲で動いてみましょう。強いだるさ・痛みなどがあるときは、その日はゆっくり休むなど体調に合わせて過ごしましょう。当院リハビリテーション課では、術後の早期社会復帰や症状緩和を目的に運動療法と生活習慣指導を行っています。担当医と相談しながらリハビリテーション治療のサポートを積極的に受けていただくことが大切です。

[→リハビリテーション課ページリンク](#)

➤ 術後の再発・転移治療について

再発は、手術後約 5 年以内で起こることが多いです。再発した部位、転移に対する治療は、薬物療法（抗がん剤治療）が中心になります。再発した部位の進行度、患者さんの身体の状態や前回行った治療法とその時の効果などを考慮し決定します。

➤ がんの診断で使われる主な検査について

がんの疑いがあるとき下記のさまざまな検査で診断します。

- ・血液検査（腫瘍マーカー）
- ・病理検査（細胞診検査・組織学的検査）
- ・内視鏡検査
- ・超音波（エコー）検査
- ・X線（レントゲン）検査
- ・CT（コンピューター断層撮影）検査
- ・MRI 検査（磁気共鳴撮影）検査

[→放射線課ページリンク](#)

